

ナルニア国物語

魔術師のおい

10

C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

第10話 滅びの言葉(後編)



もとはと
言え

悪いのは
姉のほうじゃ



姉がわらわを
追いつめたのじゃ

あらゆる
神々の呪いを
あの女の上に
永遠にあらしめよ！

わらわはいつでも
和睦に応じる
用意があつた

——そうとも

そして命乞いを
聞いてやる用意も
あつた

あの女が
王座を明け渡しさえ
すれば



だが
あの女は
それを拒んだ

あの女の傲慢さが
全世界を
破壊したのじゃ

戦が始まった
あとでさえ

双方とも魔法を
使わぬという厳たる
申し合わせがあった

愚か者め!

魔術ならばわらわのほうか
上回ることを知らなんだでは
あるまいに

……しかし

むこうが
約定を
破ったからには
どうすることが
できよう?

それは
何なんですか?



秘中の秘じや



しかるべき
儀式によりて
口にしたならば



はるか古代より

われら一族の
偉大なる王たちの
あいだには

ある言葉の
存在することが
伝えられておった

それを
口にした者
以外の

生きとし生けるものを
破滅させる力を
持つという言葉じや

しかるに
昔の王たちは
心の弱い
腰抜けぞろいで

自らその言葉を
知ろうとする
試みはせぬという
誓いを立て

また
後の世に続く
すべての
王たちにも
同じことを
誓わせた

だが

わらわは
秘密の場所へ
おもむいて

その言葉を
つきとめたのじゃ

そのために
途方もない
犠牲を払った

わらわが好き好んで
その言葉を
使ったのではない

あの女めが
使わせたのじゃ

わらわはあらゆる
ほかの手を繰り出して
あの女と戦った

兵士どもの
血をおしみなく
流して――

人でなし！

最後の
大合戦は

ここ
チャーンの都で
三日三晩続いた

三日の
あいだ

わらわはまさに
この場所に立って
戦況を
見下ろしておった

わらわの姉が
反乱軍を率いて

街から
このテラスへと続く
大階段の半ばまで
押し寄せるのを見るまで

わが軍の
最後の兵士が
倒れるまで

そして
あの
呪われた女

わらわは
魔法を使わなんだ



たがいの顔が
見えるほど
敵軍が
近づいてくるまで
待った

あの女は

身の毛もよだつ
邪悪なる目を光らせて
わらわを見すえ――

勝ったな

いかにも

……

ただし

勝ったのは
そなたでは
ないわ

わらわは
〈滅びの言葉〉を
□にした

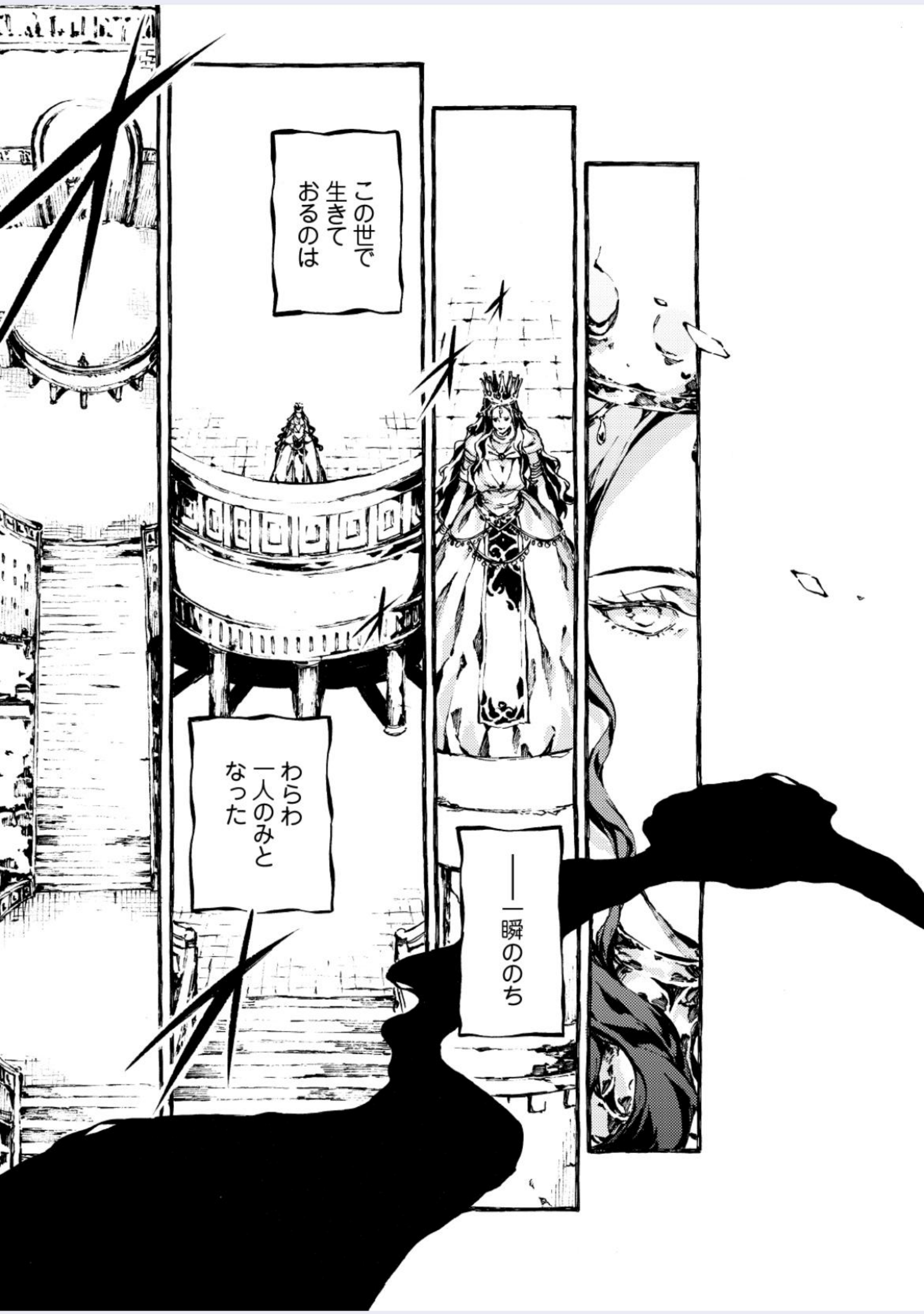
そのあと

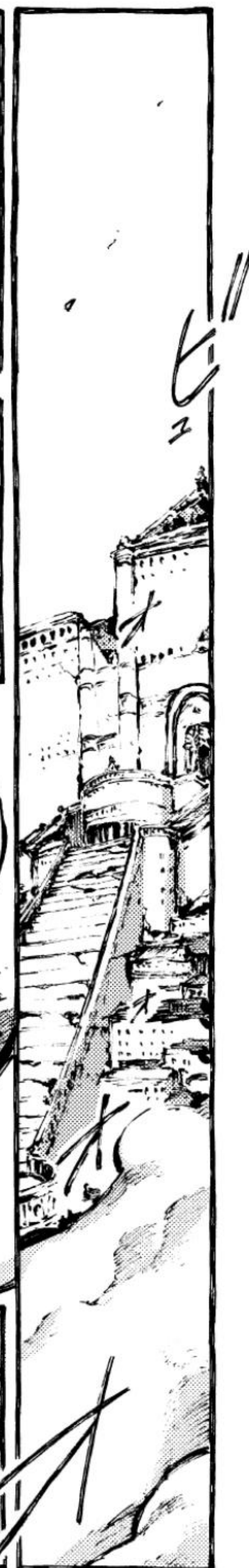


この世で
生きて
おるのは

わらわ
一人のみと
なった

——瞬ののち







わらわは
女王であるぞ

民は
わ・ら・わ・の・も・
の・だ



わが意のままに
使う以外に

何の役に
立つのじゃ？



…それでも
やっぱりむごい
と思います



そちが
平民の子だと
いうことを
忘れておったわ

そちのような者に
国家の論理が
分かるはずもない



ああ
そうか

よいか
小童



そちや
そちのような
平民どもに
おいては
悪行とされる
ことであつても

わらわのような
偉大なる女王に
おいては悪行とは
ならぬのじや

わらわの肩には
世界の重責が
かかつておる

わらわは
いかなる掟にも
縛られるものではない

わらわのような
人間は

孤高なる運命を
さずけられて
おるのじや

いいかね

わたしの
ような人間は

孤高なる運命を
さずけられて
おるのだ

…伯父さんも
同じ言葉を
□にしていた

女王が
□にしたほうが
はるかに堂々と
聞こえるけれど……

…それで

そのあとは
どうしたん
ですか？

わらわは
あらかじめ

先祖たちの像が
並んでおる大広間に
強い魔法をかけておいた

その魔法とは

わらわも
先祖たちとともに
像のようになって
眠りにつき

何者かがやってきて
ベルを打ち
わらわを
目ざめさせるまで

千年の歳月が
過ぎようとも
食べ物も火もなしに
生きつづけられる

…というもの
だったのじゃ



あんなに
大きくて

あんなに
赤くて

あんなに
冷たくて



太陽が
あんなふうになったのも
〈滅びの言葉〉のせい
なのですか？

どのようなと
言うのじゃ？



太陽は昔から
ああいうものと
きまつておる

少なくとも

何万年

何十万年の
あいだ

そのほうどもの
世界では

ちがう種類の
太陽なのか

はい

もっと
小さくて

もっと
黄色っぽくて

もっと
たくさん
熱を出します

ほほう！



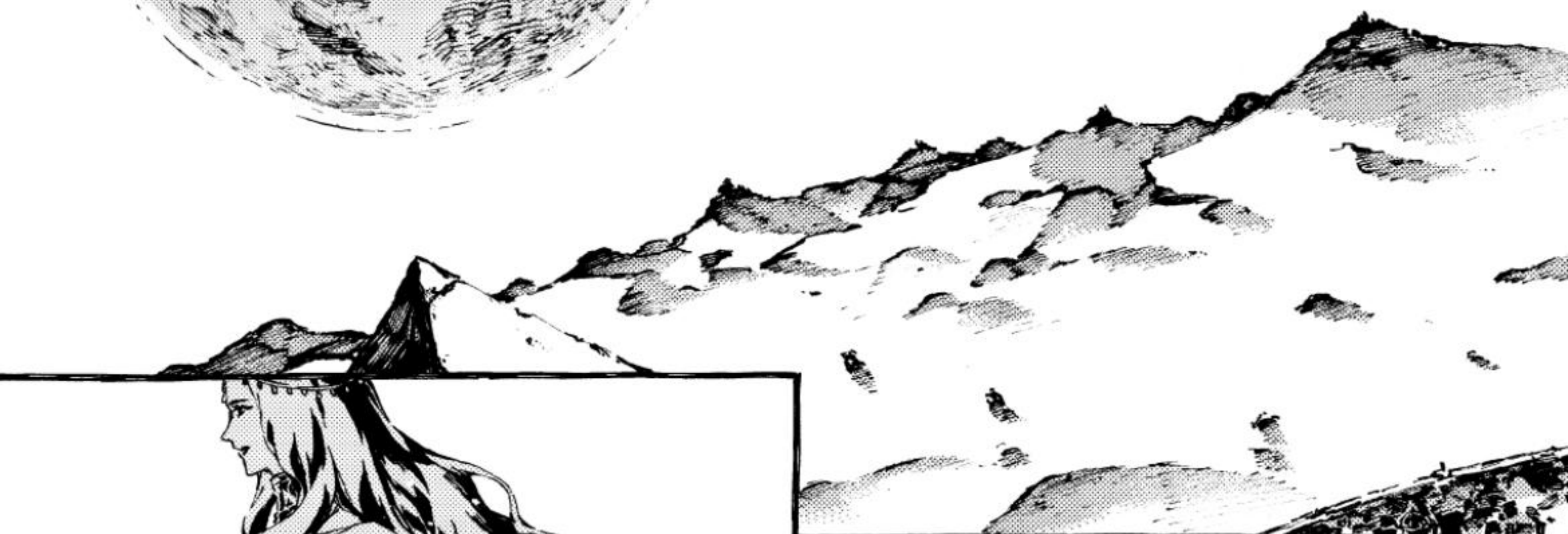
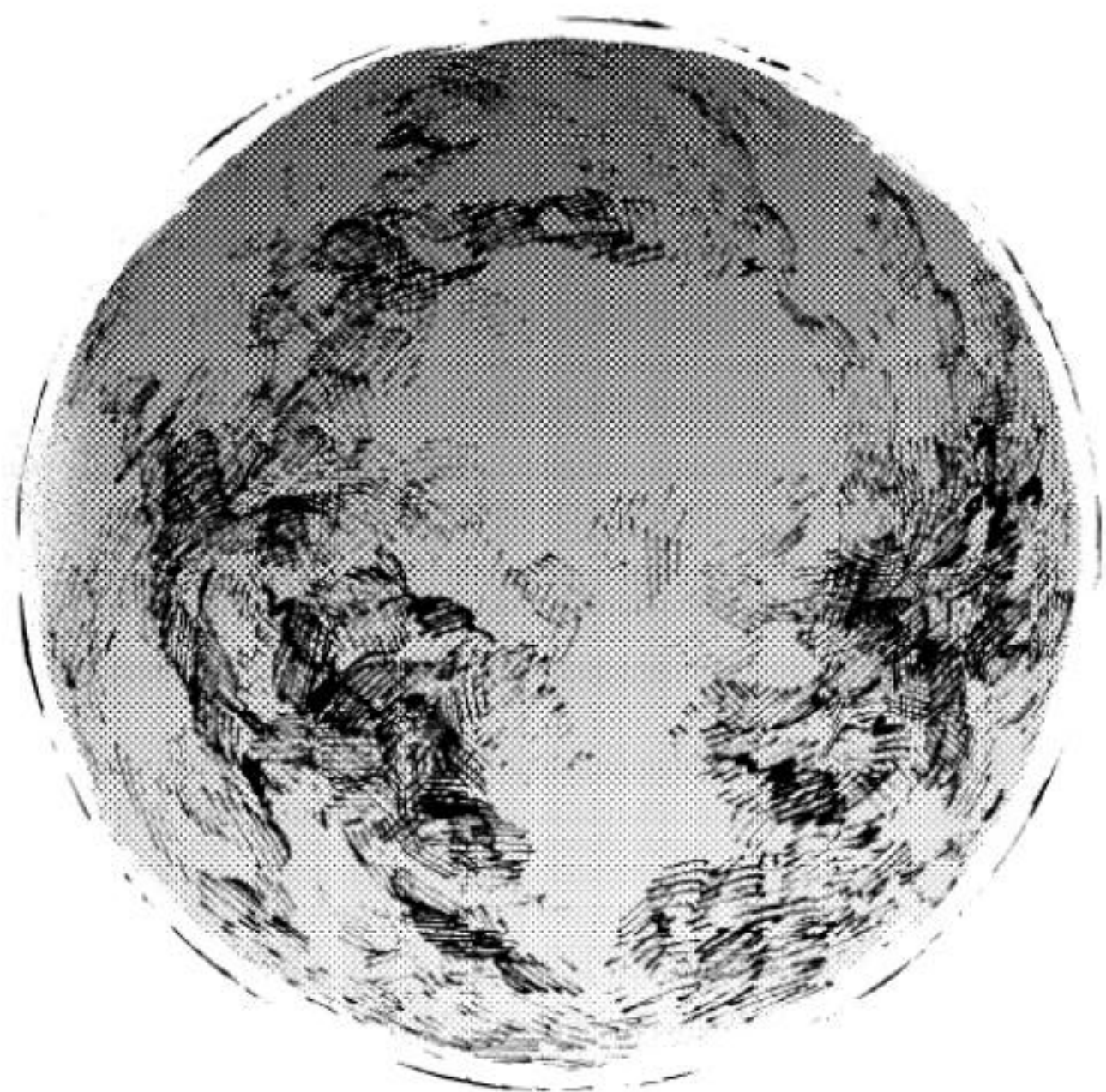


つまり

そのほうどもの
世界は
まだ若いのだな

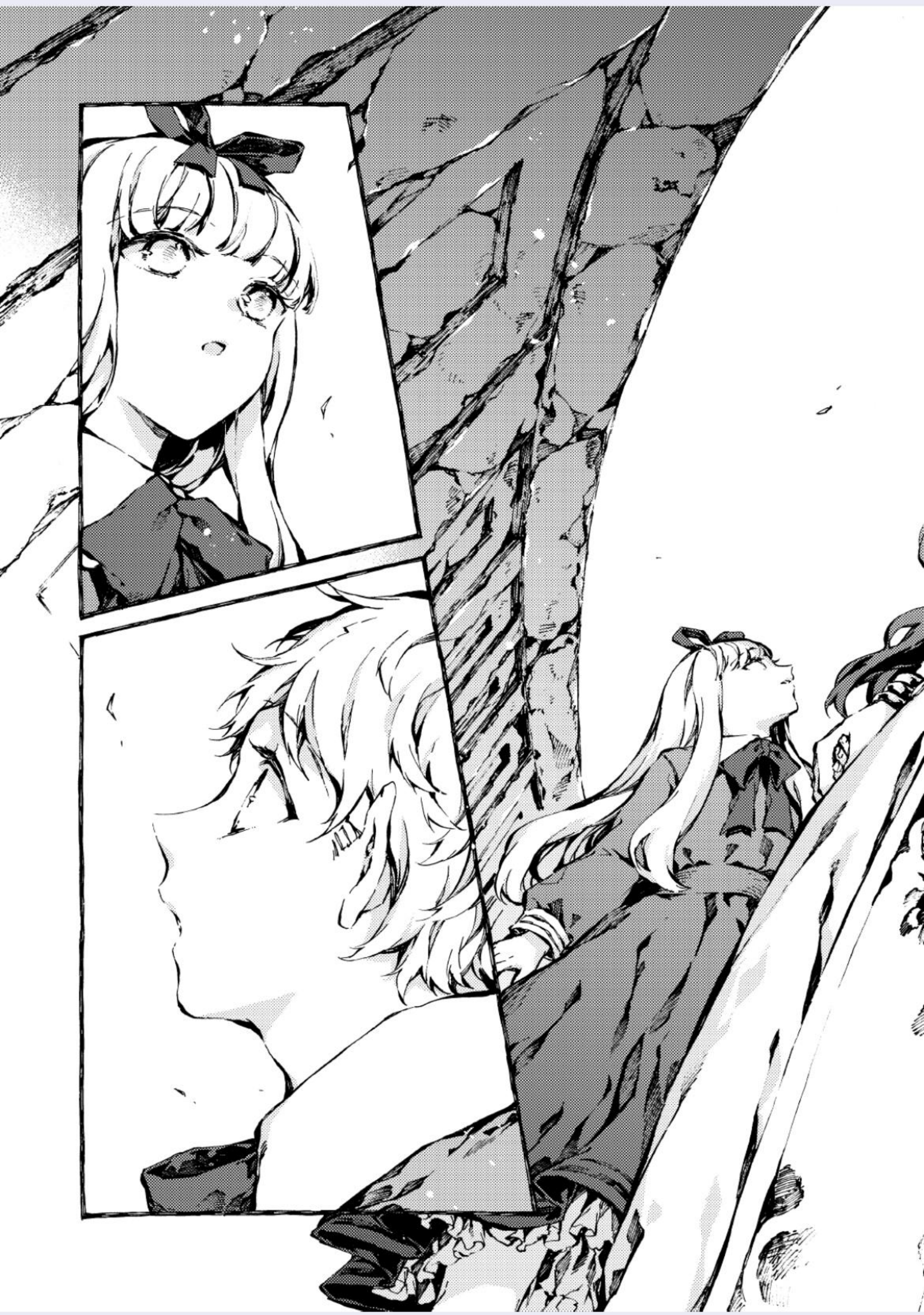
さあ

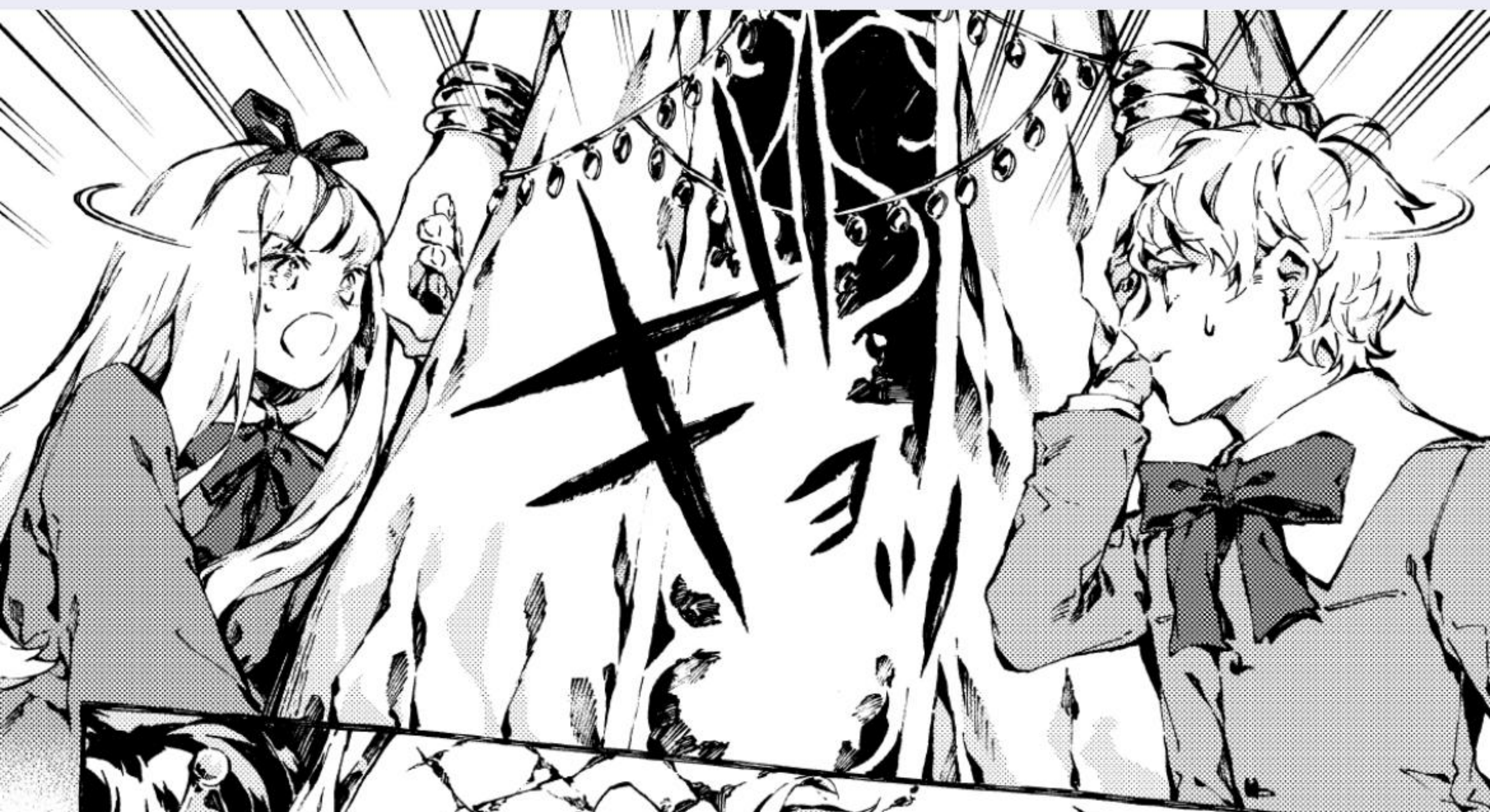
行こう



そのほうごもの
世界へ
行くのじゃ

もちろん





女王と一緒に
ぼくたちの世界へ
行くだって…!?

ぼ…

ぼくたちの
世界にですか?

そそ…

そうとは
思いません
でした

そんなの
ごめんだ!

わらわを迎えに
まいったので
なければ

何のために
そちはここへ
つかわれ
たのじゃ?

ぼくたちの世界なんか
ぜんぜん気に入らないと
思いますよ

第一どうやって
連れて帰れるのかも
分からないし…

この人が
来るような場所じゃ
ないよね

ポリー？

すごく退屈な
ところだし

見るべきものも
ろくにないし…

ポリーは指輪に
手が届かないし

ぼく一人で
ポリーを置いて帰る
わけにはいかない…

わらわが
支配するように
なれば

たちまちの
うちに
見るべき都と
なろう

そんなこと
無理です

ちがうんです
支配なんて
させてもらえ
ませんよ

ああ…

早くここから
離れたい…！

これまで

あまたの
偉大なる王たちが
チャーン王家に
刃向かおうとした

しかし

かれらは
すべて倒れ

名前さえも
忘れ去られた

愚か者どもめ！

わからぬのか

わらわの
この美貌と魔法を
もってすれば

一年もたたぬうちに
そのほうどもの世界など
まるごとわが足もとに
ひれ伏すことになるぞ

さっさと
呪文を使って

わらわを
そのほうどもの世界へ
連れてまいれ

とんでも
ないこと
になっちゃった

おそろく

そちは
自分の伯父のことを
心配しておるのであろう

だが

わらわに
しかるべき
敬意を払えば
命と王位は
許してつかわす

そちの伯父と
戦うために

そのほうどもの
世界へ行く
わけではない
からな

そちをここへ
送ってよこす方法
を見つけたのであれば

そちの伯父は
なかなかの魔術師に
ちがいない

そちの伯父は
全世界の王で
あるのか？

それとも
一部を支配して
おるのか？

王なんかじゃ
ありません

魔術というものは
いつの世においても
王の血統が継ぐもの
ではないのか？

平民の魔術師など
聞いたこともないわ

そちが真実を
述べようと述べまいと
わらわには真実を
見とおす力がある

そちの伯父は
そのほうどもの世界の
偉大なる王であり
偉大なる魔術師であるに
ちがいない

そして
その魔術を
用いて

わらわの顔を
魔法の鏡か

いつわりを
申すでない

あるいは
魔法の水盤に映し
見たにちがいない

そして
わらわの美しさに
心を奪われ

世界を根底より
揺るがせし
強力なる呪文を用いて
世界と世界をへだてる
広き淵を超え

わらわの
恩寵を願ひ

そのほうどもの世界へ
迎えんがために
そちを送りこんだに
ちがいない

答えるがよい

そうでは
ないのか？

いや

ちよつと
ちがうんですけど……

ぜんぜん
ちがうわよ！

そんな話

一から十まで
でたらめじゃない！

小童め！



いまだ！

早く！





つづく